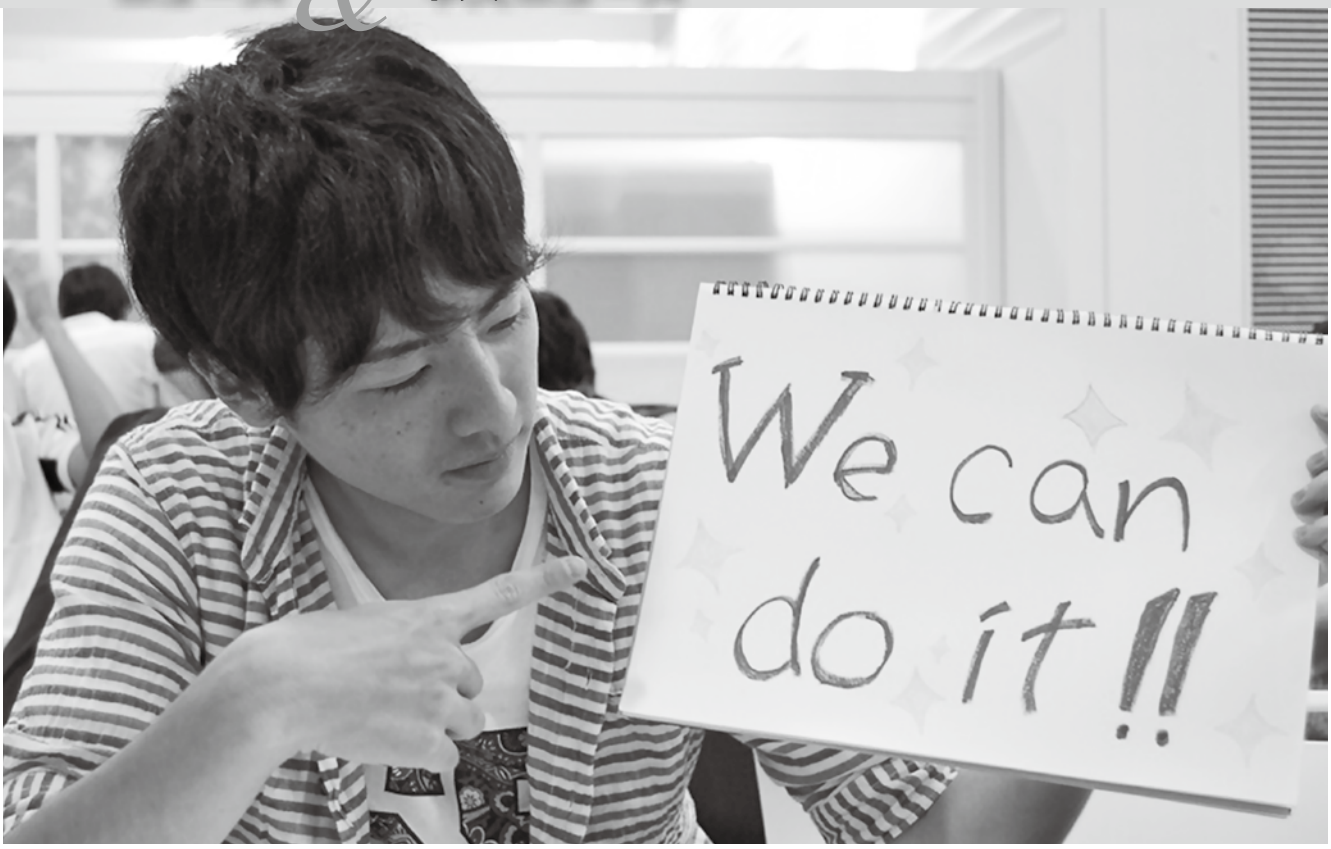

メッセージボードを持った実行委員長の工藤さん

進歩していく者なら誰でも挑戦できる

中央大学野島記念 Business Award2015

決勝観戦記

学事部 学事課　清水 大輔

ファイナリストたちの先陣を切って壇上に登ったチーム「埼玉男児」。その隣に進んだ１人の社会人が、マイクを握った。

悲願の「メンター」導入

「最初は大丈夫か？と思いましたが、ＤＩＹを本気でやりたいというのが伝わってきました。彼らを応援してやってください」

チーム「Litchee Orange」の面々

壇上でエールを送ったのは本学ビジネススクール修了生の亀岡章さん。彼らのビジネスプラン作成を支援した「メンター」だ。

ビジネスコンテストにおけるメンターとは「プランのブラッシュアップに携わる優れた助言者」を指す。だが、壇上から直接語りかけ、あるいは代読されるメッセージに思いを託したメンターたちの様子は「恩師」という言葉がぴったりだ。今回のテーマ「-progress-」が掲げた「たくさんの人と交わり、そして同じ志を持つ仲間と出会える大会に」という理想通りの大会が完成した。

2015年12月13日に行われた中央大学野島記念 Business Award は、今回で９年目を迎える大学主催のビジネスコンテストである。出場にあたって、学部や経験は不問。参加費も不要で、１人でも参加できる。

例えば大学スポーツは、才能に恵まれた者が、類いまれなる実績を武器に進学し、更なる競争に挑む世界だ。一方、野島記念出場者のほとんどは、事業計画書を書くのさえ初めてだ。そのような中でも、野島記念は様々な支援イベントを通じて、手探りでビジネスに挑戦する者たちを、毎年、堂々たる決勝プレゼンに導いてきた。今回のファイナリスト

中央大学野島記念 Business Award 2015

の顔触れも、普段からビジネスを学ぶ商学部だけではなく、経済学部や法学部と幅広い。数年前には理工学部生がコンテストを制したこともある。チャンスは全学生に与えられているのだ。

しかし、出場者だけでなく、大会も更に進歩したい。実際のビジネスを知る者からの助言は、大会のクオリティーを確実に上げる。メンター制度の導入は、歴代実行委員の悲願だった。

これを実現したのは、商学部２年の工藤雄大さん率いる実行委員たち。本学のビジネススクールの在学生・修了生の「同じ中大生」を支援したいという気持ち、専門職大学院と学部との連携を形にし、野島記念に新たな歴史を作った。

悔しさの中に満足感

この日までの道のりは平坦ではなかった。先輩の後を受け継ぎ、４月に活動を始めた時の実行委員はたったの３人。メンバーを増やすため、新歓期間中に説明会を実施しようにも、とにかく人手が足りない。やっと人数が集まっても、従来のやり方の踏襲は許されない。前例のないメンター制度。これを実のあるものにするためには、大会の審査内容も全面的に見直さなければならなかった。今回の運営自体が、まさしく「挑戦」だった。

今回の大会を見事制したのは、チーム「谷口ゼミ」。フィリピンで実際に行った古着販売の実績を元に、今回のビジネスを作り上げた。決勝直前、ビジネススクールで行われた事前メンタリングでは「慈善活動として立派でも、ビジネスとして成り立つのか？」という厳しい意見も受けたが、それを吹き飛ばし、観覧に訪れた先生の目の前で頂点に輝いた。

もちろん、勝者の陰には、敗れた者がいる。

「（コスチューム代は）大赤字です」と苦笑して話してくれたのはチーム「Litchee Orange」。１次予選の審査員だった社長に喚起され、社長のトレードマークであったフルーツ型キャップを購入しプレゼンに臨んだが、惜しくも栄冠には至らなかった。昨年の優勝チームと母体を同じにする「こみゅっと。」、リベンジを期して参加した「クールジャパン盛り上げ隊」、中高生向けのカフェビジネスを引っ提げ決勝に進出した「オーランドブルーム」も苦杯を舐めた。それでも、どの顔にも、悔しさの中に満足感があふれていた。

コンテストの今後の目標は、出資者である野島廣司氏（株式会社ノジマ代表執行役社長）の願いである「ビジネス界で活躍する中大出身者」の継続した輩出だ。

優勝した谷口ゼミ。左から谷口洋志教授、成瀬開さん、小野玲奈さん、（右後方は）メンターの岩野雅明さん

では、事業で成功するための条件とは何か。決勝審査員の一人が、僕が一番尊敬する人が言ったことだと紹介した言葉を引いてみたい。

「３つだ。まず、人よりがんばっている。もうこの時点で100人に１人だ。次、死ぬ気でやってるんだ。俺人生かけてやってるんだ。これも100人に１人だ。最後が一番大事だ。俺は成功するまでやった」

参加も運営も、そしてその先の創業も、決して楽な道ではない。それでも、中央大学には、進歩していく者なら誰でも挑戦できる「野島記念」がある。

大会は今年、記念すべき10周年を迎える。

目標を黒板に大書した実行委員会のメンバー８人（右から４番目が工藤さん）